

# 猪木正道氏の防大教育

## に及ぼした影響

火箱 芳文 陸自74

### 編集委員長

この原稿は、火箱氏が「猪木正道研究会」において講演されたものであり、関係者の了解を得て掲載させていただきま

### ●猪木先生の在任時代（昭和45年7月～昭和53年7月）

私は1年間、防衛大学校幹事として勤務しました。そのときに「母校で学生教育に当たる立場になって、防大の教育理念とは如何なるものか」というようなことを改めて考えたことがありました。その考察の中で猪木正道先生が残された業績というのを調べたことがありました。

第3代学長として猪木先生が防大に着任をされたのは、昭和45年7月です。私は防大18期生ですので、昭和45年4月に入学して、在校間、猪木先生の下で受けた防大教育に誇りをもち恩も感じています。もちろん当時田舎出の右も左もわからない青年に、猪木先生の高尚な考えなどが十分理解でき

ていたはずありませんが、平成19年から1年間、防大の幹事の時代、猪木先生の防大での教育における業績について私なりに研究したことがあります。「学長、教育者として猪木正道先生が防大生教育に及ぼした影響」について、私なりに分析をした結果を報告します。

### ・猪木学長長の防大教育への考え方

まず、猪木先生は、どのような思いをもって防大校長を引き受けたかということですが、防大の同窓会誌「云報」（第8号）に、「防衛大学校に入学して」という記事が載っており、この記事の中で校長を引き受けた理由を述べられています。

「防衛大学校長を命じられた時、入学した心組みで重責に当たりたい」という書き出しから、自分の甥が防大を受けることに對して、学校の先生が反對をしていたということに非常に憤りを覚え、受けろということを受けさせたいわけですが、実際には、1次試験は合格したものの、2次試験の身体検査で視力が足りなかったということ、別の道に行かれたということにふれられています。一部の高校で防大への進学を妨害しようとする動きがあることに憤慨したとのことです。

もう一つは、京都大学の教授をなさ

れたときに、以前は自衛官出身者も大学院に入っていたのですが、1960年代の半ばごろから、京都大学でも自衛官出身者の入学を妨害しようとする動きが表面化してきたこともあり、これについては非常に憤りを覚えたということが書かれております。自衛隊の入学阻止闘争をやっている学生は、一つは純粹で素朴な空想的平和主義者だということ。それについては、「戦後の空想的平和主義の心情がアレルギーという形で沈殿しているのはある程度やむをえないが、危険なのはその人たちの心情を巧みに利用して日本国を精神的にも物質的にも武装解除しようとしている破壊勢力の陰謀だ」と断じています。

こういうのが一番危険なのだ。当時の社会的風潮に對して敢然と反論しています。そして「こういう情勢の下で防大に入学している学生は立派な青年であり、自分自身も防大に入学を許された気持ちで勉強したい」と決心した。空想的平和主義を排して「戦闘的民主主義」思想が必要なのだとして、防衛大学校長を引き受けたと述べられています。

最後のほうに「1期生が入学されたころは横先生の下に全く新しい理想の学校を創立しようという意気に燃えていたに相違ない。防大で鍛えられ卒業

した今、陸・海・空の中堅幹部や防大の教官になっておられる方々に對して敬意と感謝の気持ちを表したい」と書かれており、「人類の歴史は、防衛の意志と能力を欠いた国民が、どんな悲惨な過程に陥るか疑問の余地がないほどはつきりしている。1億の日本国民が平和に生活するためには陸・海・空自衛隊という防衛集団の存在は不可欠である。自衛隊の規模が人口や国力に比べて小さいだけに、将来自衛隊の幹部となるべき者を教育し、訓練する防衛大学校の使命はますます重大だ」という士官候補生学校教育への熱い思いをもって、学長として着任されたわけです。

### ・猪木学長と中曽根長官

私自身も学生当時、噂話で聞いたことがあるのですが、学長に猪木先生を選任されたのは、当時の中曽根防衛庁長官です。一部の当時の自民党の人たちの中には、先生が民社系であるので反対をするような動きもあったようでしたが、豊富な経験と卓越した理論家で学術的貢献も大ということ、中曽根長官が選任をされました。

防大校長に民間の学識経験者を起用することに「国民に向かって防大ひいては自衛隊のイメージチェンジを図り」行政能力よりも教育者としての

人格・識見を備えた、猪木先生を防大生の「精神的支柱」というふうな期待をしていたということです。まさしく当時、私どもの認識として、学校の中でも「自衛隊は違憲である」と堂々と教える先生もいました。大江健三郎氏が、「防大生は僕らの世代の恥辱である」というようなことを新聞紙上で

私はまだ1年生で著名な作家の三島由紀夫の活動、行動、考え方などよくわかっていなかったのですが、学校長という大先生が言われていることの方が正しいと信じ、おれたち防大生の存在は国民から期待されているのだ、軽挙妄動すべきではない。こういう認識を持つた次第です。

防大の創設は出発したわけですが、事後、警察予備隊の中で、「警察予備隊幹部候補生訓練学校設置要綱(案)」が作成されて、これが保安大学校のもとになるわけです。このときの合意事項は「一般大学並みの教養に重点を置き、術科は主として卒業後それぞれの実施学校で修得させるため一般大学に近い形にする」「術科については、士官学校ですから必要はあるものの、基礎的部分の教育にとどめ、その後実施学校において、しっかり教育をしよう」ということでした。

海上自衛隊はできていませんでした。米軍顧問団あたりからのアドバイスにより、海軍のアナポリスについても考慮する必要性から、アメリカの海軍兵学校についても参考にするのが検討されています。ここには保安隊という治安維持のための組織であるものの軍学校という位置づけが伺えます。

言ったこともあって、当時の風潮としては横須賀以外では制服を着て堂々と歩くというのもちよつと憚れるかなというような感じを私自身少なからず持っておりまして。それを先生は「自衛隊は合憲であり、防衛集団の存在は不可欠」と我々に諄々と説いてくださったということ。これは防大生にとって精神的支柱を得たようなもので、大変心強く思つた次第です。

●猪木学校長の防大教育理念の踏襲と発展  
●防大の教育理念  
防大の教育理念は、保安大学校(防衛大学校)創設の経緯を知らずして語ることはできません。

米軍のリτζウエイ將軍などと吉田総理は会見したりしてアドバイスももらっています。理工学系の大学の幹部養成学校の設立要綱が正式起案され、この中に理工学系の教育機関としての方向性と学生数が当初は250名だったのを500名に変更したことが記されています。学生数は事後の部隊の編成に大きく関わってきましたので、陸上要員だけでなく大体250名ぐらいで足りたはずですが、海上要員を含めるともう少し数を増し、倍ぐらいの規模が必要と思つたのではと想像しています。

正式に幹部養成学校の構想が確立したのは、昭和27年2月に長官と国務大臣が決定された。このときに、米国からは学校長は「制服員」とし、生徒隊をつくれ。要するに一つの組織をつくって全寮制にして、ウエストポイントにならうような学校をつくれというアドバイスを受けるのですが、最終的には増原長官は、学校長は「文官」とするということを決定します。ここに新しい士官学校?の学校長はいわゆる「軍人」ではなく「文官」がふさわしいと決心されました。

・11月25日三島事件発生と猪木学校長の  
もう一つ、大きな衝撃的な事件がその年の11月25日に起きました。「三島事件」です。三島由紀夫が憲法改正のため自衛隊の総決起(クーデター)を呼び掛けた事件に対して、私もぼんやりと覚えています。猪木先生が、学生を朝礼場に集めて、「自衛隊は憲法違反ではない。治安出動なる行動は軍隊を私兵化することになる」「これからしっかり勉学と訓練に精励して、国民の期待に応えろ」と、説かれました。

昭和26年6月、私が生まれた年ですが、当時の吉田総理から増原忠吉警察予備隊本部長官に対して、「軍隊をつくるのに兵隊をつくって幹部が後では間に合わない」と中堅幹部の養成の指示が出ます。旧軍の反省から「下克上のない幹部をつくってくれ」と具体的に要望されています。吉田茂が企図した戦後の軍隊の将校のあるべき姿が端的に表わされています。このことから

更にアメリカのウエストポイントの陸軍士官学校についても諸事万般ならえとの指示も出ています。また、まだ

の時から一体化の意識を持たせる必要性

・11月25日三島事件発生と猪木学校長の  
もう一つ、大きな衝撃的な事件がその年の11月25日に起きました。「三島事件」です。三島由紀夫が憲法改正のため自衛隊の総決起(クーデター)を呼び掛けた事件に対して、私もぼんやりと覚えています。猪木先生が、学生を朝礼場に集めて、「自衛隊は憲法違反ではない。治安出動なる行動は軍隊を私兵化することになる」「これからしっかり勉学と訓練に精励して、国民の期待に応えろ」と、説かれました。

昭和26年6月、私が生まれた年ですが、当時の吉田総理から増原忠吉警察予備隊本部長官に対して、「軍隊をつくるのに兵隊をつくって幹部が後では間に合わない」と中堅幹部の養成の指示が出ます。旧軍の反省から「下克上のない幹部をつくってくれ」と具体的に要望されています。吉田茂が企図した戦後の軍隊の将校のあるべき姿が端的に表わされています。このことから

更にアメリカのウエストポイントの陸軍士官学校についても諸事万般ならえとの指示も出ています。また、まだ

の時から一体化の意識を持たせる必要性

を設立に当たった方たちが持っていたからです。なぜかという点、「旧陸軍・海軍の反目、当時アメリカでも陸軍・海軍は非常に反目があるので、これを一つの学校の中で育てねば」という動きがここで始まったのです。

さらに、将来の保安庁の部隊幹部となるものは広範な知識を有して、常に誤らざる正確な判断をなし得ることが重要であり、大学校学生の間には専門的技術的な教育が不十分であつてもやむを得ないという考え方で学問にある程度優先するというにしました。

それを受けて学校長を誰にするかというのは吉田総理が非常に悩んだところですが、当時、慶應大学の小泉信三氏に相談をし、小泉氏の推薦で同じ慶應大学の常任理事の横智雄氏が再三の懇請の末、学校長に決定されます。横学校長は昭和27年8月に着任をして、早速、防衛大学の前身である保安大学校を開校まで導いていきます。

当時の保安大を理工学系大学にする意義は、人文・社会科学系が軽視されたわけではなく、一つは当時の我が国の科学技術が諸外国に比べて非常に立ち遅れていたこと。二つ目は軍事組織の幹部として近代装備を駆使するには科学技術の知識が必要だということ。三つ目は新しい軍事組織の幹部には科学的な思考力を養成する必要が

あつたということ。四つ目は当時日本には理工系の大学が非常に少なく、自衛隊が理工学部の出身者を自前で養成しなければならなかつたというような背景がありました。更には後々の理工学の研究科という下地にもなるところの部分があつたようです。決して人文・社会科学の教育が軽視されたわけではないのです。

### ・教科課程、訓練課程、校友会活動

横学校長の下で検討されたのは、教科を工学並びに保安警備の学問に関する基礎知識をまず習得させることと、「学生隊」というものを編成して、これも陸海空の混合編成にするということ。もう一つ大きな柱として、特別体育活動があります。将来の制服幹部として体力、気力をしっかり養成する必要があつたことから自主的な編成による「校友会活動」（クラブ活動）を設け、これを防大の3本柱の一つにする。要するに、教室で学び、学生隊で学び、そして校友会活動でしっかり学ぶというこの3本柱がスタートしたということです。

き社会人はもちろんであるが、次の三つの課程に要約してこれから教育する。

- ① 人としての修養錬成
- ② 工学並びに保安、警備の学問に関する基礎知識の習得（防衛学、工学）
- ③ 指導統率の資格を具える

この三つの課程は、いずれかに偏してはならず、常に均衡を保つことが重要ということ。いかに学問、技術の造詣が深くとも人としての性格や指揮する才幹において欠けることあれば、本大学校で履習する目的の大半は失われる。将来指揮官となるためには学問、技術、人間性が大事である。どんなに頭がよくて学問ができてても人間性でだめな者はだめ、いくら人間がよくても技術が劣るようではだめというように訓示をされた。これが受け継がれている防大教育の真の理念だと思えます。

もう一つは、「民主主義に対して的確な理解をせよ」ということです。命令と服従という関係を、特に学生舎生活、校友会活動において、「規律なくして真の自由はなく、遵法精神または正義に服従する思想なくして真の民主主義は成立いたしません」、こういうことを教えて、「いわゆる服従の神髄を学生生活で学べ」ということを言われました。

「服従の誇り」といったものが自衛隊においても脈々と流れています。これが吉田総理の求めた「下剋上のない幹部の育成」の具現化であると思います。

先人の横学校長や吉田総理がつくつたこの考えを、猪木先生も踏襲し、この防大をもつともつと発展させ高みを目指すために着任をされたわけです。

### ●猪木改革の意義

・猪木構想（人文・社会科学専攻課程の新設と人文・社会科学教育の充実）

猪木先生の大きな業績は、防大の今までの教育の理念をしつかり踏襲して、将来の自衛隊の有用な幹部の養成をするため改革すべきところを改革し、さらに発展をさせたことです。その大きな一つが、昭和45年7月に猪木先生が学校長に着任してから直ちに始めた「猪木構想」と言われる人文・社会科学系専攻の新設と人文・社会科学系教育の強化です。先生は10月に陸海・空の自衛隊幹部候補生学校を視察した折、学校長等から、人文・社会科学系の教育を強く要望され、これが一つのきっかけとなつて、防大当局、防衛庁の内局も併せて検討が始まりました。

昭和46年4月27日に防大臨時評議会が開催され、「防大改革に関する検討方針」の中に、先生の言葉が残っております。「各幕僚長等と面接し、また

卒業生などの意見を徹しても、人文・

社会科学部門の強化の必要性を強く感じた。このため、一般教育科目としての人文・社会科学部門を強化すること

も考えたが、これでは不十分であることが判明したので、新たに人文・社会科学系の2専攻を設けることにした。

……学生定員530名は変えることなく、この範囲で60名くらいを充当したい。昭和48年度から募集。今のところ管理(管理行政)学科と国際関係学科を考えている」

このときに、陸・海・空幕僚監部からの意見、アンケートがあったのですけれども、非常に興味深い調査結果があります。陸上幕僚監部は、人文・社会科学系素養の必要性を83・6%が認め、さらに防大で、人文・社会科学系の教育は行うのがいいというのが87・5%。海上幕僚監部も71%くらいが、

人文・社会科学系専攻の新設に賛成。航空幕僚監部は、人文・社会科学教育強化を可とするもの25%、人文・社会科学系専攻の新設を可とするものが25%、両方併用が50%。やはり航空自衛隊では航空機を中心とする近代装備技術を理解する上では理工学系の学問が優先すべきとの要求が強く、陸・海の方は、大部隊運用に必要な人文・社会科学系の知識の必要性を感じ、防大でこれをもう少し教えてほしいと考え

ていたようです。

一番の決め手となったのは、陸上幕僚監部からの答申でした。幹部学校のCGS課程(指揮幕僚課程)というのがあり、旧陸軍大学に相当する課程の学生に対する評価の意見がありました。

「今のCGSの学生は、社会事象間の複雑な因果関係、価値関係を総合的に把握し、判断する能力にやや欠けている」、「戦争の実相を把握し将来戦の様相を類推しうる能力を付与することが急務である」、「学生の部隊指揮経験の不足と併せて、一般教養の不足が教育のレベルアップを妨げている」、「部隊の統御や組織的管理等に関する教育の効率性を減じている」というものでした。

防大側としても、これは本校学生全体に対する警告として受け取り、猪木校長の指針と併せて人文・社会科学系の専攻新設を促すだけでなく、理工学系学生に対する人文・社会科学系教育の強化を改めて痛感させるものになったようです。

専攻新設は、最終的には、猪木学校長が言われたように、2専攻コースに落ちつきましたが問題は教官の充実を図ることでした。猪木学校長の『回想録』の中には、当時、立命館大学の渡辺一先生、成蹊大学の佐瀬昌盛先生、

京都産業大学の西原正先生など、人文・社会科学の先生を招聘されて、教官の充実を図られたということです。

人文・社会科学教育の充実  
専攻を新設したほか、もう一つの業績として人文・社会科学教育の充実があります。当時20期生まで防大には人文・社会科学系の専攻はなく、入校して3年生から専攻が分かれる理工学系の大学でした。

私は応用化学を選択しましたが、当時は自衛隊が憲法違反ではないかとか、税金泥棒といったように自衛隊に對して冷たい風潮も残っていました。学生の中にそれが微妙に影響して自分の将来の職業に対する不安を感じているものもいました。胸を張って自信をもって自衛隊に入ろうと言うには憲法と自衛隊、自衛隊の意義などの知識もなければ判断力も不足している状況でした。

それを是正すべく理工学専攻の改編を行うとともに、理工学系学生に対する現行カリキュラムでの人文・社会科学系教育の強化を図りました。即ち防衛学の教育内容を人文・社会科学系科目充実の方向に改善したり、「自由選択」科目を「必須科目」に位置づけたりして改カリキュラムを採用しました。

このカリキュラムは20期生から適用され事後の防大教育に大きな影響を及ぼしたと思います。この人文・社会科学系教育の充実の先頭に立たれたのが猪木先生でした。

私もよく覚えていますけれども、自衛隊は憲法違反かという風潮の中で、変わった先生がいました。チェ・ゲバの本を買わせたり、エドガー・斯诺の『中国の赤い星』という本を買わないと欠点をつけられるというような話を先輩から聞いたたり、あるいは「自衛隊は合憲か、違憲か」という問題を出して、「合憲」と書いたら欠点が付くというような話も聞きました。

私は別の先生に教わったので、いわゆる芦田修正なるものを教わり、これが「前項の目的を達成するために自衛力を持つことができるのだ」と、こういう講義を受けたりしたので、私は大変なためになったと思っております。人文・社会科学系教育の充実は特に理工学系専攻の防大生に対して、非常に良い影響を及ぼしたのではないかと思います。

教育の狙い効果  
猪木先生の大きな教育の狙いとして、理工学の知識、人文・社会科学の知識に通暁し、バランスのとれた見方、考え方がとれる人材の育成を目指され

た。

た。

た。

たのではないかと思っております。

そして、社会事象間の複雑な因果関係を判断するには、戦史や歴史といった学問が必要であり、これがまた非常に役に立ったのではないかと思います。

私の自衛隊での経験から、小隊長などの初・中級幹部の時代には、近代装備を駆使して訓練していく上において理工学系の知識は非常に重要です。しかしながら上級幹部になるに伴い大部隊を指揮・統率する上で歴史・戦史への造詣の深さ、戦略・戦術眼の養成などのためには、人文・社会学系の学問的な素養が非常に必要になってきます。

このことは陸上幕僚監部などの上級司令部勤務に就いたとき、さらに重要性を痛感した覚えがあります。防大は理工学系の学生が大半ですが、この基礎段階で人文・社会学系の教育の充実が図られたのは、事後の防大生の自衛官としての進路に良い影響を及ぼしたものと思います。

### ●猪木学校長の新しい試み ・海外研修制度の発足

先生が残されたものをもう一つ上げると、学生の海外研修制度があります。外国の士官学校に教週間研修に行くような制度が昭和46年から開始されました。猪木学校長が、46年5月米国の

空軍士官学校と海軍兵学校を視察した際、以前から構想していた研修生の派遣を米国側に申し入れたところ、受け入れ表明があり、帰国後、早速検討が始まっております。

防大生の国際的な視野を広め、勉強意欲を向上させ、外国士官候補生との相互交流を図ることを目的に、選考要件として防衛大学の学生を代表するにふさわしい人間、即ち将来に対する堅固な意思を持ち、学科、訓練、学生舎生活優秀で他学生からの信望があり、体力抜群、校友会活動が活発など防大の教育理念を実践している学生が選抜されました。

私の二つ上の16期生が最初で、当初は急なことで予算措置が間に合わず、財団法人吉田茂国際教育基金から渡航費の助成を受け、10月から陸軍士官学校へ2名、海軍士官学校へ1名、空軍士官学校へ1名、計4名の16期生の派遣が実現しました。(カナダの統合軍士官学校も研修)彼らは後々の陸・空の将官、海の提督になった方たちです。

昭和47年の次の17期生からは、正式に予算化されて同様の選考基準で派遣されました。これ以降、昭和51年から52年度からは仏国陸軍士官学校へ、58年度からは韓国3軍士官学校、62年度からタイ国3軍士官学校、シンガポ-

ル軍士官学校への派遣につながっていくのです。

外国の士官学校との交流が始まり、今まで国内の他大学しか見ていなかったものが、同世代の外国の学生・学校への関心が高まり、国際的な視野の広がりといったものができた大きなきっかけになりました。この海外研修制度以前当時の学生としては、私的なレベルといえますが夏季、冬季・春季休暇中、海外渡航に行くものは稀であったのですが、学校長を始め学校当局からの海外旅行への積極的な後押しへの方針転換がありました。

ちなみに、昭和48年度では50名程度しか行ってなかったのですが、49年度に100名、50年代は200名を超え、63年度には430名ぐらいに達し、防大の国際化を表す現象の一つとなっております。

また留学生の受け入れについてもタイ国やシンガポールなどに拡大しました。これが今の士官学校学生との交流につながり、現在防大で各国の士官学校の学生が集まりシンポジウムをひらいて、堂々と外国学生と一緒に議論をしている。私どもの学生の頃とは隔世の感がしています。

この海外研修制度は現在の学生の国際的教養付与の先駆的事业であり、学生の国際的な視野を広め、勉強意欲

の向上に寄与し、士気の高揚につながったものと思います。

### ・褒賞制度の創設

猪木校長の新しい試みでもう一点申し上げたいのは褒賞制度を設けたことです。『私の二十世紀―猪木正道回顧録』の中に、「旧陸・海軍、特に陸軍で恩賜の軍刀などを首席の学生に下賜して、大きな弊害をもたらしたこと…：防衛大学校では表彰は全く行われていなかった」とあります。初代の榎校長は、この表彰制度はやっておりませんでした。これについての見解は、

「榎校長が、軍刀はもとより、一切の表彰を廃止されたことは卓見だった…：確かに全学生、あるいは1学年から首席や次席を無理に決めることは弊害を伴うが、他面どんなに努力しようとも、また怠けていようとも、一切考慮しないというのも行き過ぎ…：私は学生生活のあらゆる面を考慮して、きめ細かく、優れた学生を表彰すれば必ず士気は上がるものと確信した」ということで、「学生生活の大きな3本柱であります学業、学生舎生活、クラブ活動といったものに対して、この三つの流れで成果を取めている学生をきちんと表彰し、将来への励みと目標を与えたいと願ったのです。これこそ正に豊かな人間性、広い視野、服従の誇

りを持てる将来の幹部自衛官を目指している学生に対する学校長・教育者としての応えなのです」と述べられています。私は、慧眼であつたと思います。

褒章の中身は定期褒章と臨時褒章があり、定期褒章は教育課程（理工学、人文・社会科学、防衛学といった学問

の表彰）と、訓練課程、学生隊生活での優秀者、体力または健康管理の優秀者というような部門に分けて、約1割の学生に対して褒章制度を設けました。臨時褒章は校友会活動褒章と校内競技会褒章で、私みたいな劣等生といえますか、柔道ばかりやっていた者に対しても、学校長から褒章を受けた覚

べらまでいった者が表彰対象でした。これは本当にうれしかったです。そういう意味で3本柱の何某か一つでもしっかりとやってきたものを表彰すること。防大の教育理念に沿って褒賞制度をつくつたというのは非常に士気が上がりました。私のような者でも自衛隊で何とかやれる、これはやらなければいけないという気にもなりません。そのほかにカッター競漕や水泳、断郊競技会はもちろん表彰して頂くのですが、伝統の棒倒し競技会がありますが、私自身棒倒しの大隊のキャプテンをやっています、校内で優勝して、学校長から優勝カップをもらったとき

には天にも昇るよううれしさでした。そういう意味でこの褒賞制度というのは学生の修学意欲に大きな影響を及ぼしたのではないかと思つています。

### ・野宴の実施

最後にもう一つは、教育者という猪木先生の人柄が滲み出るのですけれど、48年10月に「野宴」を初めて行なつたことです。学生は毎日学業、クラブ活動、学生舎生活で分刻みの生活を送っており、ゆっくりと教職員と語る時間などないのが実情でした。規律厳正な生活に少しでも潤いと余裕をもたせようと、前期の定期試験が終わつた後、学生と教職員との懇親、気分転換と士気の高揚を図ることを目的に校内で酒を酌み交わす試み（当然、未成年者はお茶やコーラです）を始めたのです。最初は学生食堂で始まったのですけれども、私どもが4年の時、49年は花立訓練場でやりました。

学校長は直接学生と接し胸襟を開いて語り合うことによつて、学生に感化を及ぼしたいと願つていたのでと申します。学生は日頃はめつたにお目にかかれない学校長が車座になり、直接声をかけていただくことで感激ものでした。その意味では学校長というより教育者猪木正道先生の人柄が前面に出

た事業だつたのではと思ひます。教育者として全人格教育に当たられたのだと思ひます。ここで学生は学校長を始め先生方の偉大なる人柄に接する機会を持つことができ、学生としての大いなる喜びでもあつたということです。

残念ながら、その後だんだんいろんな形式が変わつていき、残念ながら昭和60年代に、当初の目的から外れてきて、この野宴はなくなりまして。

しかし、五百旗頭学校長のときに復活をしました。聞くところによると、学生は「野宴を復活していただき感謝している」と口々に言つており、復活出来てよかつたと思ひます。防大における手づくりの人づくり教育の中の一環として大きな影響を及ぼしたのではないかと思つております。

### ●おわりに

最後になりますが、猪木学校長は積初代学校長の掲げた豊かな人間性、広い視野、科学的思考力を具える人材の育成という教育の理念をしっかりと踏襲をして、それをさらに人文・社会科学系の専門課程の新設や理工学課程の学化すること、更に高みを目指す防大生の育成につなげたかつたのではと思ひます。

制度などを定めて、今日の自衛隊の国際化への対応のため、日本だけではなく国際的にも広い視野と科学的思考力を具える人材の育成を目指したからではないかと思ひます。それだけ先見の明があつた学校長でした。

褒賞制度という、ある意味では大した話ではないと思ひますが、受ける学生にとつては、学校長から褒められることは非常に感激で自信にもつながり士気の高揚になるわけです。教育の3本柱に沿い、4年間の努力の成果として将来の自衛官として必要不可欠な部分を評価されることは、非常に大事なことだと思つております。

今、思うのですが、防大の学生時代ただ仰ぎ見ていた学校長ですけれども、今、よくよく考えてみますと、今日こうしていられるのは防大の4年間の教育があつたればこそと、心底思つております。防大卒業生として常に誇りに思い、防大からの深い愛情を感じながら、私は自衛官を40年間も続けることができたと思つています。

そういう意味で、防大の教育の理念、猪木学校長が残された業績についてご紹介させていただきます。